

「学習意欲に 乏しい大学生の 協同学習と音 読に対する態度 Slow Learners' Attitude to Reading Aloud and Group Work

盛岡貴昭
津村修志
吹原顕子
大阪商業大学

Takaaki Morioka
Shuji Tsumura
Akiko Fukihara
Osaka University of
Commerce

Reference Data:

Morioka, T., Tsumura, S., & Fukihara, A. (2015). Slow learners' attitude to reading aloud and group work. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *JALT2014 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

協同学習についてはJohnson, Johnson, and Smith (1998) など、音読については鈴木・門田 (2013) などによって、それぞれの効果が報告されている。しかし英語学習の意欲に欠ける大学生は積極的にそれらの活動に取り組んでくれるだろうか。そこで両活動についてどのような意識を持っているのか、またそれらに何らかの関連があるのかを探るため、4年制私立大学の非英語専攻学生426名を対象に質問紙調査を行った。英語学習を「好き」、「嫌い」と回答したグループに分け質問紙項目の回答についての検定を行った。協同学習では両グループで、音読では「好き」グループに意義を認める多くの回答が見られた。「嫌い」グループは、協同学習では周りに頼りがちになること、音読では発音練習に不安感をもつことに回答が多く見られた。したがって、グループ学習では役割を明確にすること、そして「声を出す」ことに抵抗感をなくすことができれば、協同学習の導入が容易にできるのではないかと推測される。

Although the effectiveness of cooperative learning is reported by researchers like Johnson, Johnson, and Smith (1998) and oral reading by Suzuki and Kadota (2013), less motivated university students may not actively participate in these activities. We surveyed 426 non-English majors and asked them how they felt about cooperative learning and oral reading. We divided them into two groups: students who liked English and students who did not like English. Both groups thought learning in groups was important, but the students who did not like English thought they depended on others too much. The students who liked English perceived oral reading positively but students who did not like English did not want to read aloud in class. Thus, the role of group work should be clarified. If students gain sufficient experience with reading aloud, introducing cooperative learning would be easier.

杉

江 (2011) によると、協同学習の学習理論とは、ペア・グループで活動することにより、学習者が主体的な学びの構え、幅広い知的習得、仲間と共に課題解決に向うことのできる対人技能、さらには、他者を尊重する民主的な態度、といった「学力」を身につけていくための基本的な考えを言

JALT2014 CONFERENCE PROCEEDINGS



う。Johnson, Johnson, and Smith (1998) では、「協同学習グループ」と単なる「見せかけの学習グループ」の違いを指摘し、協同学習に関して研究者間で微妙な差異があるものの、それらの共通点を包括的に整理し、協同での学びあいが成立するためには、1. 互恵的な協力関係、2. 個人の責任性、3. 対面での相互作用、4. 社会的スキル、5. グループの改善手続きの条件を満たす必要性を述べている。協同学習の有効性はさまざまな論文で示されている (Millis & Cottell, 1998; Springer, Stanne, & Donovan, 1998)。例えば、Johnson et al. (1998) は、協同学習は個別学習や競争学習よりも学力そして対人関係を高める効果があること立証している。中西 (2012) は、講義形式の授業を行うよりもグループで行うPBL (problem-based learning) を取り入れた授業を行うほうが、学習者は自己調整学習方略の使用を頻繁に行う傾向があることを検証している。協同学習では、学習者の協力的な関係を構築しながら同じ目的を共有し、自主的に学び合い、他者に伝える機会があるため、知識を詰め込むだけの授業とは違い、学習者の思考力を養い、内発的動機を高めることができるであろう。

一方、鈴木・門田 (2012) によると、音読は、①音声面での強化、②文字—音声のリンクの強化、③単語—音声—意味のリンクの強化、④統語知識の内在化を図る目的で行われる。鈴木 (2009) は、音読の原則として、音読をさせる前に十分聞かせる、英文の内容を理解させる、そして多様な方法で目的に応じた適切な順序で何度も行うことをあげている。音読の効果に関して、山口 (2012) は、音読を授業に取り入れた結果、大学生の読解速度と読解効率に上昇が見られたと報告している。中嶋 (2000) は、英語学習の初期段階では、教科書の本文が読めないことがつまづきを感じる大きな要因であることを指摘しているが、音読練習がその改善策となりえるだろう。単語や構文、文法に関する指導で理解した知識は、宣言的知識 (declarative knowledge) を身につけた状態と言われ、Anderson (1983) によると、宣言的知識は長期記憶から意識的に取り出して利用できる知識であるために利用に時間がかかる。そのため、学習者は音読練習を行うことにより、意識的な努力をせずに、入力される情報を自動的に処理できる能力である、自動化 (automaticity) を身につける必要がある。英語をコミュニケーションの手段として使用できる指導は、英語力の低い学習者を対象とした場合にも行われるべきであるだけでなく、音読により学習者が教師の解説を聞くだけでなく、自主的に活動する体験をすることで英語嫌いを克服できるかもしれない。また、音読は教師と学生で行うだけでなく、学生間で行わせることも可能である。従って、音読を協同学習の活動として行わせることもできるであろう。

平成25年度公立高等学校・中等教育学校 (後期課程) における、文部科学省の英語教育実施状況調査 (2014) の結果では、英検準2級に合格、ま

たは英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる高校3年生はわずか31.0%とある。昨今、大学全入時代という状況を考えると、大学には中高で英語学習に躓き、学習意欲の乏しい大学生が多くいると考えられる。盛岡 (2014) の調査では、協同学習は英語力が高い学生よりも、低い学生の情意面を高める効果がある可能性が高いことが分かった。さらに津村 (2013) は、ペア活動を授業で行うことにより意識の好転が見られたことを実証している。協同学習を取り入れた授業を継続することは、学習意欲に欠ける学生に効果的であることは先行研究から確認できる。しかし、英語に対して苦手意識があり学習意欲の乏しい学生が、週に数回程度しか英語の授業で会わない他の学生と最初から積極的な学び合い、または大きな声を出して音読活動に取り組みめるだろうか。学習者の協同学習、音読への捉え方はさまざまであるため、意識の違いを把握してからどのように協同学習と音読を授業に導入すべきか対策を講じるべきではないだろうか。

方法

研究課題

Dörnyei and Ushioda (2001) によると、意欲喪失の要因の一つに、外国語に対する否定的な態度を上げている。また、100名学生が回答した、前期授業終了後に行った「英語を学習するのが好きだ」、後期授業終了後に行った「英語を学ぼうという気持ちがない」のそれぞれの5件法のアンケートでは、中程度の負の相関 ($r = -.58, p < .001$) があった。そこで本研究では、学習意欲の乏しい大学生を対象に協同学習と音読を行うための意識調査を行い、今後、協同学習と音読をより円滑に授業に導入するためのあり方について示唆を得ることにある。また、声に出すことと協同学習に何らかの関連があるのかについても探りたい。

調査時期と対象者

対象者は、4年制大学の1年生で、経済、経営、商学および公共経営学の専攻生であり、中高の基礎から学び直す必要のある学生の一部に調査協力を依頼した。筆者と複数の英語の先生のクラスでアンケートを配布した。調査に協力してもらった学生は、一般の英語 (必修) の履修者431名 (男性397名、女性34名) であった。データを収集した結果、欠損値のあった5名は分析から除外したため、最終的な分析対象者数は426名 (男性392名、女性34名) となった。なお、本研究で収集したデータは、2014年JALT大会論文集に掲載されている論文「大学生の自己効力感と学習行動」(津村・盛岡) と同じものであるが、本論文では、異なる局面について考察した。

材料

英語学習意欲の欠如と英語嫌いに関連があると考え、英語を学習するのは好きか、嫌いかに分けて分析を行った。回答者である調査協力者にとっては、協同学習よりも、より広範囲の意味で使用されるグループ活動という言葉の方が理解しやすいように考えられる。従って、質問紙では、「協同」ではなく、「グループ」という言葉を用いて協同学習に対する意識調査を行った。また、質問紙(Appendix参照)の35, 43, 45, 48の質問項目に関しては、表現を変えて安永(2012)にある協同作業認識尺度を参考にした。音読に関しては英語を発音することに対する意識を質問項目とし、独自の5件法の質問紙の項目を作成した。アンケートの質問項目について参考までにCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .81$ であった。なお、逆転項目は*印でAppendixに示している。また、質問紙は分析に使用したもののみを抜粋している。補足として分析に使用した文法テストは、主に文部科学省の新学習指導要領(2012)にある中学校で習う文法事項と、Lightbown and Spada(2006)を参考にして言語を習得していく過程の初期段階で習得する形態素をそれぞれ問題とした。

手続き

2013年度の1回目もしくは2回目の授業でアンケートに回答してもらってから文法問題を解いてもらった。調査協力者の学生には成績には一切影響しないことを伝え、承諾が得られた学生に協力を依頼した。2回目の授業で調査協力を依頼したクラスでは、1回目の授業でオリエンテーションを行ったので、協同学習や音読を取り入れた授業は行っていない。

まず、調査協力者を英語学習が「好き」と回答したグループと「嫌い」と回答したグループに分けた。この場合、カテゴリ変数が2つ(「好き」と「嫌い」)あるので、質問紙項目の回答についてカイ2乗検定の独立性の検定を行った。次に、「嫌い」と回答したグループのみを対象とした。この場合カテゴリ変数が1つ(「嫌い」)の場合なので、質問項目の回答について、カイ2乗検定の適合度の検定を行った。また、習熟度別に分けて、補足的な統計的分析も行った。

結果

英語好き・嫌いとペア・グループワーク・音読の関係

Appendix 質問項目「英語を学習するのは好きだ」で、「どちらともいえない」と回答した学生(34.04%)を除き、「そう思う」、「まあ、そう思う」と

答した学生を<英語好き>グループ(12.35%)とし、「そう思わない」、「あまりそう思わない」と回答した学生を<英語嫌い>グループ(53.52%)として、協同学習と音読に関する質問紙各項目について独立性の検定を行った。|調整済み標準化残差値|>1.96、 $p < .05$ として「英語好き」と「英語嫌い」グループのうちのどちらの回答が多いといえるかを確認した。自由度は全て1である。

協同学習と関係のある質問項目の回答では、「グループで話し合うことが好きだ」($\chi^2 = 5.91, p = .015$)、「助け合って、何かをやり遂げることが好きだ」($\chi^2 = 4.10, p = .043$)、「ペアで会話練習をするのは楽しいと思う」($\chi^2 = 19.73, p < .001$)、「グループでは、他の人の意見も聞いて、自分の知識も増えると思う」($\chi^2 = 4.16, p = .041$)で<英語好き>グループの方に多く、「グループで活動すると、人任せになると思う」($\chi^2 = 6.30, p = .012$)では<英語嫌い>グループに多く回答が見られた。

音読と関連のある質問項目の回答では、「ネイティブ・スピーカーのような発音をする人にあこがれる」($\chi^2 = 18.61, p < .001$)、「発音の練習をしたい」($\chi^2 = 41.52, p < .001$)、「英文を朗読することが好きだ」($\chi^2 = 24.05, p < .001$)、「声を出して読むのは気持ちがいい」($\chi^2 = 26.28, p < .001$)、「正しいリズムやイントネーションを身に付けたいと思う」($\chi^2 = 11.46, p < .001$)で<英語好き>グループに多く、「単語の読み方が分からなくて困ることが多い」($\chi^2 = 5.92, p = .015$)では、<英語嫌い>グループに多く見られた。

英語嫌いと音読、ペア・グループワークの関係

Appendix 質問項目「英語を学習するのは好きだ」で「そう思う」、「まあ、そう思う」、「どちらともいえない」を除き、「そう思わない」、「あまりそう思わない」と回答した<英語嫌い>グループ228名を対象として質問紙の回答の適合度検定を行った。自由度は全て1である。表1は、 p 値が5%未満の質問項目のみ抜粋している。表1は、質問項目が長いので、語尾を省略して載せている。

協同学習に関して肯定的に捉えている質問項目の回答では、「知識を増やすことより、問題解決能力を身に付けたい」($\chi^2 = 20.57, p < .001$)、「他の人と協力して何かをやり遂げたいと思う」($\chi^2 = 62.27, p < .001$)、「難しいことでも、協力すればできると思う」($\chi^2 = 116.3, p < .001$)、「グループをまとめて、成果を出すことに意味があると思う」($\chi^2 = 64.03, p < .001$)、「他の人と協力して作業すると、自分だけでは思いつかないような案が出ると思う」($\chi^2 = 46.75, p < .001$)、「助け合って、何かをやり遂げることが好きだ」($\chi^2 = 50.95, p < .001$)、「グループでは、他の人の意見も聞いて、自分の知

識も増えると思う) ($\chi^2 = 59.52, p < .001$)で「そう思う」に多く、「人と話すのが苦手だ」($\chi^2 = 7.25, p = .007$)、「1人で勉強する方がいい」($\chi^2 = 9.21, p = .002$)、「優秀な人間には共同作業などする必要がない」($\chi^2 = 101.08, p < .001$)で「そう思わない」に多く回答が見られた。

協同学習に関して否定的に捉えている質問項目では、「グループで活動すると、人任せになると思う」($\chi^2 = 48.03, p < .001$)、「人前で発表することが苦手だ」($\chi^2 = 64.03, p < .001$)、「共同作業とはいつでも必ず楽をする人がいると思う」($\chi^2 = 89.19, p < .001$)に「そう思う」に多く、「ペアで会話練習をするのは楽しいと思う」($\chi^2 = 28.85, p < .001$)では「そう思わない」に多くの回答が見られた。

音読と関係のある質問項目の回答では、「間違った発音をしたときは訂正して欲しい」($\chi^2 = 50.52, p < .001$)、「単語の読み方が分からなくて困ることが多い」($\chi^2 = 134.36, p < .001$)、「正しいリズムやイントネーションを身に付けたいと思う」($\chi^2 = 27.37, p < .001$)で「そう思う」に、「英文を朗読することが好きだ」($\chi^2 = 186.5, p < .001$)、「声を出して読むのは気持ちがいい」($\chi^2 = 133.93, p < .001$)で「そう思わない」にそれぞれ多くの回答が見られた。

表1. 英語嫌いの学生を対象とした場合に有意差がある質問項目

質問項目	そう思う		そう思わない	
	n	n	χ^2	p
人と話すのが苦手	67	102	7.25	.007
発音の練習をしたい	37	105	32.56	<.001
1人で勉強する方がいい	49	84	9.21	.002
知識を増やすことより、問題解決能力を身に付けたい	80	32	20.57	<.001
他の人と協力して何かをやり遂げたい	122	26	62.27	<.001
間違った発音をしたときは訂正して欲しい	114	29	50.52	<.001
優秀な人間には共同作業などする必要がない	21	154	101.08	<.001
単語の読み方が分からなくて困ることが多い	117	16	134.31	<.001
グループで活動すると、人任せになる	120	34	48.03	<.001

質問項目	そう思う		そう思わない	
	n	n	χ^2	p
難しいことでも、協力すればできる	156	15	116.3	<.001
グループをまとめて、成果を出すことに意味がある	124	26	64.03	<.001
英文を朗読することが好き	5	201	186.5	<.001
他の人と協力して作業すると、自分だけでは思いつかないような案が出る	139	46	46.75	<.001
助け合って、何かをやり遂げることが好きだ	120	32	50.95	<.001
人前で発表することが苦手だ	143	43	64.03	<.001
共同作業とはいつでも必ず楽をする人がいる	152	26	89.19	<.001
声を出して読むのは気持ちがいい	9	159	133.93	<.001
ペアで会話練習をするのは楽しい	39	103	28.85	<.001
グループでは、他の人の意見も聞けて、自分の知識も増える	134	34	59.52	<.001
正しいリズムやイントネーションを身に付けたい	104	41	27.37	<.001

習熟度の上位群、下位群とペア・グループワーク、音読の関係

英語学習の好き・嫌いで行った分析の補正をする目的として、文法問題を使用し、習熟度別と協同学習・音読の意識の関係を確認した。習熟度別を補正とした理由は、学力に大きな差がないと考えられるためである。小数点は四捨五入し、文法テストの平均値と標準偏差を足した点数を上位群の最低点、平均点から標準点差を引いた点数を下位群の最高点とし、上位群(82名)、下位群(76名)に分けて、独立性の検定を用いて分析を行った。自由度は全て1で、|調整済み標準化残差値| > 1.96, $p < .05$ とした。表2は、質問項目が長いので、語尾を省略して載せている。

協同学習と関係のある質問項目の回答では、「グループで話し合うことが好きだ」($\chi^2 = 3.95, p = .047$)で上位群に、「人と話すのが苦手だ」($\chi^2 = 5.53, p = .019$)では下位群に多くの回答が見られた。

音読と関係のある質問項目の回答では、上位群は、「ネイティブ・スピーカーのような発音をする人にあこがれる」($\chi^2 = 5.10, p < .024$)、「声を出し

て読むのは気持ちがいい」($\chi^2 = 3.97, p = .046$)と知っている者が多いようである。

習熟度別の下位群とペア・グループワーク、音読の関係

参考までに、習熟度別の下位群を対象に質問項目の適合度検定を行った。表2は、p値が5%未満の質問項目のみ抜粋している。協同学習に関して肯定的に捉えている質問項目の回答では、「知識を増やすことより、問題解決能力を身に付けたい」($\chi^2 = 5.45, p = .020$)、「他の人と協力して何かをやり遂げたいと思う」($\chi^2 = 30.08, p < .001$)、「難しいことでも、協力すればできると思う」($\chi^2 = 47.29, p < .001$)、「グループをまとめて、成果を出すことに意味があると思う」($\chi^2 = 18.13, p < .001$)、「他の人と協力して作業すると、自分だけでは思いつかないような案が出ると思う」($\chi^2 = 14.75, p < .001$)、「助け合って、何かをやり遂げることが好きだ」($\chi^2 = 23.12, p < .001$)、「グループでは、他の人の意見も聞けて、自分の知識も増えると思う」($\chi^2 = 19.80, p < .001$)で「そう思う」に、「人と話すのが苦手だ」($\chi^2 = 3.92, p = .048$)、「1人で勉強の方がいい」($\chi^2 = 5.77, p = .016$)、「グループで活動すると、人任せになると思う」($\chi^2 = 4.90, p = .027$)、「優秀な人間には共同作業などする必要がない」($\chi^2 = 21.35, p < .001$)で「そう思わない」に、それぞれ多くの回答が見られた。

否定的に捉えている質問項目の回答では、「グループで活動すると、人任せになると思う」($\chi^2 = 10.80, p < .001$)、「人前で発表することが苦手だ」($\chi^2 = 11.27, p < .001$)、「共同作業とはいっても必ず楽をする人がいると思う」($\chi^2 = 36.48, p < .001$)で「そう思う」に有意差がある。

音読に関して肯定的に捉えている質問項目の回答では、「間違っただけの発音をしたときは訂正して欲しい」($\chi^2 = 16.20, p < .001$)、「正しいリズムやイントネーションを身に付けたいと思う」($\chi^2 = 8.70, p = .003$)で「そう思う」に多くの回答が見られ、否定的に捉えている質問項目の回答では、「単語の読み方が分からなくて困ることが多い」($\chi^2 = 47.51, p < .001$)で「そう思う」に、「英文を朗読することが好きだ」($\chi^2 = 44.58, p < .001$)、「声を出して読むのは気持ちがいい」($\chi^2 = 44.64, p < .001$)で「そう思わない」に多くの回答が見られた。

表2. 習熟度の下位群を対象とした場合に有意差がある質問項目

質問項目	そう 思う		そう思 わない	
	n	n	χ^2	p
人と話すのが苦手	18	32	3.92	.048
1人で勉強の方がいい	12	27	5.77	.016
知識を増やすことより、問題解決能力を身に付けたい	22	9	5.45	.020
他の人と協力して何かをやり遂げたい	43	5	30.08	< .001
グループで活動すると、人任せになる	13	27	4.90	.027
間違っただけの発音をしたときは訂正して欲しい	36	9	16.2	< .001
優秀な人間には共同作業などする必要がない	9	42	21.35	< .001
単語の読み方が分からなくて困ることが多い	61	5	47.51	< .001
グループで活動すると、人任せになる	36	13	10.8	< .001
難しいことでも、協力すればできる	53	2	47.29	< .001
グループをまとめて、成果を出すことに意味がある	42	11	18.13	< .001
英文を朗読することが好き	5	58	44.58	< .001
他の人と協力して作業すると、自分だけでは思いつかないような案が出る	43	14	14.75	< .001
助け合って、何かをやり遂げることが好き	42	8	23.12	< .001
人前で発表することが苦手	43	17	11.27	< .001
共同作業とはいっても必ず楽をする人がいる	52	6	36.48	< .001
声を出して読むのは気持ちがいい	3	53	44.64	< .001
グループでは、他の人の意見も聞けて、自分の知識も増える	44	11	19.8	< .001
正しいリズムやイントネーションを身に付けたい	33	13	8.7	.003

考察

上の結果から、〈英語好き〉グループの方が〈英語嫌い〉グループよりも協同学習や音読に対して肯定的に捉えており、この点では津村 (2013) の結果と一致している。〈英語好き〉グループは、周りとのコミュニケーションを図りながら学習する意欲が回答から感じられ、音読にも積極的に取り組めるであろう。一方、補足的に確認した習熟度別では、音読の意識に関しては上位群の方が肯定的に捉えているように思われるが、協同学習の意識に対しては上位群、下位群でそれほど差はないようである。協同学習が上手く機能すれば、〈英語好き〉グループは積極的に活動に取り組み、消極的な学生を引っ張ってくれるだろうが、上手く機能しない場合は、〈英語嫌い〉グループの学習機会を奪ってしまう可能性もある。従って、上記にあげた協同での学びあいが成立するための条件 (Johnson et al., 1998) の中でも、特に〈英語好き〉グループの「社会的スキル」が高まるように教師は指導すべきではないだろうか。〈英語好き〉グループの学生は、〈英語嫌い〉グループの学生を励ますことができる力を身につけ、学生間で「グループの改善手続き」を行い、グループに与えられた課題を達成するために、互いに助け合えるグループになっていかなければならない。音読活動では、音読の原則 (鈴木, 2009) の、「音読をさせる前に十分聞かせる」、「英文の内容を理解させる」段階では、教師主導で単調な授業になりがちだが、自ら意図的に音読を行う準備ができそうである。音読も目的に応じた学生が挑戦のしがいのあるさまざまな活動を取り入れることで動機づけができそうである。

〈英語嫌い〉グループでも協同学習に関しては習熟度の低い学生同様に意義を認める回答で有意差が見られた。例えば、一人で勉強するよりも、他の人と協力して何かをやり遂げたい、そして協力すれば難題も解決できるかもしれないと感じているようである。また、共同作業の必要性も感じているようである。しかしながら、協同学習の必要性を感じているが、グループの全員がそれぞれチームに貢献できるわけではないこと、そしてうまく周囲とコミュニケーションが図れないことに不安感があるようである。そのため、教師は、学生が協同学習に自信が持てるよう協同学習前に準備する時間をしっかりと与えることが大事である。そして協同での学びあいが成立するための条件 (Johnson et al., 1998) にある、「個人の責任性」が特に明確になっているべきで、英語が嫌い、または苦手意識を持つ学習者でもグループに貢献できる仕掛けを施す工夫も必要である。また、性別や人種だけでなく、習熟度に関しても多様性があるクラスで学び合えることが望ましいと McCafferty, Jacobs, and DaSilva Iddings (2006) や杉江 (2001) は述べている。しかしながら、同じクラスの生徒で学習する機会が多い中高時代とは異なり、大学の英語の授業では週に1、2度程度しか他の学生と学習する機会がない。その場

合、中学の初期段階で躓き、学習意欲の乏しい学生の協同学習に対する意識を考慮すると、学力の高い学生と学ぶ合うことに不安を感じないだろうか。このような状況で学ぶ場合は、習熟度別で到達目標を明確にし、協力しあることで学習意欲の乏しい大学生の協同学習に対する不安を取り除き、自信を高め、英語嫌い改善に繋がれることができるかもしれない。

音読に関しては、英語の発音ができるように、または読めるようになるという回答に有意差が見られたが、英文の朗読、声に出して読むことあまり好意的ではないようである。英語が読めないことが原因で音読練習に抵抗感があるようである。英語を読むことに自信をつけさせるためには、上記に挙げた音読の原則の一つである、音読させる前に十分聞かせることに時間を十分費やす必要があるだろう。そして音声に合わせて黙読させ、音と文字の一致をさせ、リズムやイントネーションを理解させたい。ペアやグループで音読を行わせる前に、学習者全員で練習をする機会を沢山与えるべきである。音読の際も役割分担を明確にしてから行わせるほうが、緊張感を持って取り組んでくれるだろう。鈴木 (2009) では「多様な方法で目的に応じた適切な順序で何度も行う」とあるが、目的に応じて少しずつできる音読活動を増やしていくようにすれば、学生の読めない不安を軽減できるかもしれない。また、上手く読めた場合は、褒めてあげ自信を持たせてあげたい。そして協同学習を通して学生間で助け合える関係性ができれば、音読の導入が容易になるのではないかと推測される。

結びにかえて

本調査の目的は、学習意欲の乏しい大学生を対象に協同学習と音読を行うための意識調査を行うことであった。その結果、学習意欲の乏しい大学生は、協同学習に意義を感じているが、グループでは人任せになってしまうことに不安感があるようである。そして音読では正しい発音を身につけたい意欲はあるようだが、単語の読み方がわからないため、音読練習はあまり行いたくないようである。

今回の調査では時期が入学して間もなく、まだ大学生生活に慣れておらず、調査時期が回答に影響を与えている可能性も否定できない。また、本学の大学生のみを対象としたため、ランダム化されたサンプルを抽出しているとは言えない。今後はさまざまな大学に通う大学生を対象とした意識調査も行っていきたい。

Bio Data:

Takaaki Morioka works at Osaka University of Commerce as an English teacher. He likes soccer and rock climbing.

Shuji Tsumura has been with Osaka University of Commerce since 2007. He likes Shorinji Kempo, an esoteric Japanese martial art.

Akiko Fukihara has been with Osaka University of Commerce since 2012. Although it is impossible to think about her life without a car, she is interested in eco-driving.

引用文献

Anderson, J. R. (1983). *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow, UK: Longman.

Johnson, D. W., Johnson, F. P., & Smith, K. A. (1998). *Active learning: Cooperation in the college classroom*. Edina, MN: Interaction Book Company.

Lightbown, P., & Spada, N. M. (2006). *How languages are learned*. Oxford: Oxford University Press.

McCaffery, S. G., Jacobs, G. M., & DaSilva Iddings, A. C. (Eds.). (2006). *Cooperative learning and second language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

Millis, B. J., & Cottell, P. G., Jr. (1998). *Cooperative learning for higher education faculty*. Phoenix, AZ: The Oryx Press.

文部科学省. (2012). 「学習指導要領」. http://www.mext.go.jp/a_menu/sho-tou/new-cs/youryouchu/_icsFiles/afiedfile/2010/12/16/121504.pdfより取得.

文部科学省. (2014). 「英語教育実施状況調査」. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2014/09/03/1351570_06.pdfより取得.

盛岡貴昭. (2014). 「協同学習理論を活かしたペア・グループ活動への取り組み」『大阪商業大学論集』. 4号, 123-133.

中嶋洋一. (2000). 『英語好きにする授業マネジメント30の技』. 東京: 明治図書.

中西良文. (2012). 「Problem-based learning (PBL) が自己調整学習方略使用および学習動機づけに及ぼす効果」. 『協同と教育』第8号, 10-19.

杉江修治. (2011). 『協同学習入門基本の理解と51の工夫』. 京都: ナカニシヤ出版.

Springer, L., Stanne, M. E., & Donovan, S. (1998). *EFFECTS of cooperative learning on undergraduates in science, mathematics, engineering, and technology: A metaanalysis*. Madison: University of Wisconsin, National Institute for Science Education.

鈴木寿一. (2009). 「音読指導で英語力を伸ばすための留意点: 現場での実践から得られた実証データをもとに」. 『英語教育2月号』. 大修館書店, 34-36.

鈴木寿一・門田修平. (2012). 『英語音読指導ハンドブック』. 東京: 大修館書店. 資料

津村修志・盛岡貴昭. (2015). 大学生の自己効力感と学習行動. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *JALT2014 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

Appendix

- 当てはまる数字に○を付けて回答してください。
- クラス: _____ 番号: _____
- 氏名: _____

- 1 = そう思わない
- 2 = あまりそう思わない
- 3 = どちらともいえない
- 4 = まあ、そう思う
- 5 = そう思う

24	*人と話すのが苦手だ。	1	2	3	4	5
25	ネイティブ・スピーカーのような発音をする人にあこがれる。	1	2	3	4	5
26	グループで話し合うことが好きだ。	1	2	3	4	5
27	発音の練習をしたい。	1	2	3	4	5

28	*1人で勉強する方がいい。	1	2	3	4	5
29	知識を増やすことより、問題解決能力を身に付けたい。	1	2	3	4	5
30	他の人と協力して何かをやり遂げたいと思う。	1	2	3	4	5
31	*他の人と一緒に作業すると、自分の思うようにできない。	1	2	3	4	5
32	間違った発音をしたときは訂正して欲しい。	1	2	3	4	5
33	*優秀な人間には共同作業などする必要がない。	1	2	3	4	5
34	*周りの人に気を遣うようなことはしたくない。	1	2	3	4	5
35	*単語の読み方が分からなくて困ることが多い。	1	2	3	4	5
36	*グループで活動すると、人任せになると思う。	1	2	3	4	5
37	難しいことでも、協力すればできると思う。	1	2	3	4	5
38	グループをまとめて、成果を出すことに意味があると思う。	1	2	3	4	5
39	英文を朗読することが好きだ。	1	2	3	4	5
40	他の人と協力して作業すると、自分だけでは思いつかないような案が出ると思う。	1	2	3	4	5

41	助け合って、何かをやり遂げることが好きだ。	1	2	3	4	5
42	*授業で声を出すことに抵抗がある。	1	2	3	4	5
43	*グループで作業すると時間がかかると思う。	1	2	3	4	5
44	*人前で発表することが苦手だ。	1	2	3	4	5
45	*共同作業とはいっても必ず楽をする人がいると思う。	1	2	3	4	5
46	声を出して読むのは気持ちがいい。	1	2	3	4	5
47	ペアで会話練習をするのは楽しいと思う。	1	2	3	4	5
48	グループでは、他の人の意見も聞けて、自分の知識も増えると思う。	1	2	3	4	5
49	正しいリズムやイントネーションを身に付けたいと思う。	1	2	3	4	5
50	英語を学習するのは好きだ。	1	2	3	4	5